

白夜と極夜

北欧はいま白夜の季節である。柔らかな陽の光が大地を照らし、水平線上にゆるやかな角度で近づいて沈む太陽が真夜中近くまで薄明を残し白夜をもたらしている。北緯六六・五度の北極圏の線上では夏至の一日だけ太陽が沈まない日が出現し、サンタの故郷、極北の地ラップランドでは沈まない太陽の日々が続きトナカイたちが短い夏を駆け抜けている。

南半球は逆に真冬の季節である。南極圏では冬至を中心の一月中姿を見せない極夜（よくや）の世界となり、昭和基地ではすでに太陽が沈んだままの日々がひと月も続いている。五月の声を聞くとともに急に昼が短くなり、次第に太陽が地平線を這うようになる。日の出から日没にかけての太陽を一枚のフィルムに多重露光すると、夕暮れ時の丸い太陽が海水で覆われた水平線のすぐ上を転がるよう動く有様が写る。

「転がる太陽」を写すと間もなく太陽と別

かれる日がやってくる。暗さとともに厳しい寒さが押し寄せブリザートが吹き荒び、晴れた夜空にはオーロラが乱舞するようになる。

筆者もかつて南極で越冬した経験があるが日本を離れて半年、寒さ暗さに追い討ちをかけられてミッドワインターの祭の頃に寂しさが頂点に達する。だがこの折り返し点を過ぎると戻りは速く、真昼の北の空の薄明かりが日々に明るさを増して、ついには四十日ぶり別れた太陽が帰つて来る。この瞬間は極夜が厳しいほどに感激がひとしおとなりいつまでも忘れられない。

極夜が数か月も続く大陸上では七月末の低温の極へと向かって気温が下がり続け、日本の中陸基地では今年の五月の末ですでにマイナス七十九度を観測、世界の最低気温の記録にあと十度と迫っている。

白夜と極夜は地球の自転軸の傾きがもたらす四季の極限の姿である。海と大気に加えて地軸の傾きが豊かな季節の移ろいを演出してくれていることになる。（九五年七月一日）